

## オリンピックピックと女性③

## オリンピックピック評論家

## 伊藤 公

国際オリンピック委員会に女性委員が誕生してはや十二年。日本オリンピック委員会では二年前に誕生した唯一の女性理事の活躍が期待されています。

## 日本女性にはまだ厚い壁が…

欧米諸国は、レディーファーストの本場である。五輪を発展させたその欧米諸国で、なぜ女性の五輪への参加が遅々として進まなかったのか。女性スポーツ財団日本支部（WSF ジャパン）代表の三ツ谷洋子さんは「近代五輪復興者のクーベルタンの基本的な考え方と、米国体育協会（AAU）にみられるような、女性が過激なスポーツをやると体によくはないとの風潮があったからではないか」と指摘する。

特に米国のAAUは、産婦人科医や生理学者らの意見をたてにとつて、「女性を五輪に入れるな」との運動を展開していたらしい。「ハードなトレーニングや筋肉の発達は女性機能を退化させる」というのが主な理由だったようだ。だが、時代が進むにつれて、そのような理由は根拠が薄れてきた。一九七〇年代から八〇年代初めにかけて、WSFをはじめとする女子スポーツの振興を訴える組織・機関などから、五輪に女子種目をふやそうとする動きも活発化した。

そのような時代を背景に、八一年に

女性の国際オリンピック委員会（IO）委員が誕生し、八四年のロサンゼルス大会からは、マラソンにも女子の参加が正式に認められ、八八年のソウル大会ではデモンストレーション種目だった柔道も、今夏のバルセロナ大会では正式種目に格上げされた。

国内に目を向けると、日本のアマチュアスポーツ界の統括団体で、女性役員が初登場したのは、八二年である。元体操選手で日本スポーツ芸術協会選出の小野清子さんが日本オリンピック委員会（JOOC）初の女性委員に選ばれた。昨年、名実ともに独立した新生JOOCの理事二十人の中には、全日本なぎなた連盟選出の河盛敬子さんが紅一点選ばれ、活躍している。

しかし、三ツ谷さんは「ベルリンの壁は厚かったが、日本スポーツ界の壁は、それ以上に厚い」と、ため息ももらしている。日本スポーツ界で、女性が十分に活躍するまでには、まだ時間がかかるかもしれない。

（92年12月10日信濃毎日新聞掲載記事より転載）

## 女性としてのビジョンと見識を

後日談から披露する。この『オリンピックと女性』は、私が昨年七月八日から本年四月三日まで、ほぼ一ヶ月おきに信濃毎日新聞に八十五回にわたって連載した『オリンピック100年』からの転載で、同紙に掲載したときのテーマは「女性の台頭」だった。

この企画ものを連載するにあたり、私は信濃毎日新聞に「アマチュアリズム」「ナショナルリズム」「巨大化」などを始めとして、いくつかのテーマを提案したが、その一つが「女性の台頭」だった。近代五輪百年の歴史を振り返ってみると、女性の台頭は非常に大きなテトマのような気がしてならなかったために、あえて独立して採り上げることにしたのだ。

私はこれまで近代五輪の歴史について書くとき、「一八九六年の第一回アテネ大会は、古代オリンピックと同じように『女人禁制』の大会だった」とだけ紹介するにとどめ、それ以上に言及することはほとんどなかった。ところが「女性の台頭」を提案した以上、「オリンピックと女性」について、相当に

突っ込んだ資料調査と取材をせざるを得なかった。

それはさておき、資料を調べ、取材を重ねながら、改めて再認識したのは、百年に及ぶ五輪運動の歴史の中で、女性が本当の意味での市民権を獲得したのは、十二年前の一九八一年からという事実だった。男性の城だった国際オリンピック委員会（IOCC）に、女性の委員が誕生したからだ。現在は九十数人のIOCC委員の中に女性が七人もおり、そのうちの二人、フロール・イサバ・フォンセカ夫人とアニタ・デフランツ女史は執行部（理事会）に身を置き、活躍している。この調子では女性のIOCC副会長も遠からず登場することだろう。

そうなると、各国内オリンピック委員会（NOC）も、女性を登用せざるを得なくなりそうだ。かといって、単に、「女性の登用を」と訴えるだけでは能がない。女性は女性としてのビジョンと見識を持つ必要がある。

〔訂正前号の『オリンピックと女性』の文中「ミリア・アリス夫人」とあるのは「アリス・ミリア夫人」の誤りでした。訂正します。〕

〈おわり〉